

福祉の見方・考え方を働かせた実践的・体験的な指導方法
～求められる資質・能力を見据えた3観点ごとの評価規準の作成を通して～

1 はじめに

平成30年告示の学習指導要領では、「福祉の見方・考え方」が重要な視点となっている。ここで示される「福祉の見方・考え方」とは、生活に関する事象を、当事者の考えや状況、環境の継続性に着目して捉え、人間としての尊厳の保持と自立を目指して、適切かつ効果的な社会福祉と関連づけることを意味している。社会福祉を特別なものとして捉えるのではなく、社会の一員として生活上の問題に関心を持ち、自分と他者を結び付けながら、当事者の考えに触れることが大切である。また、近年、社会の変化は著しく、物事を多面的に捉える力が求められている。福祉に携わる者として、課題を自ら発見し、根拠に基づいた解決策を講じるには、確かな知識と技術などに裏付けられた思考力・判断力・表現力等を養うことが重要である。

これらのことから、本研究では、科目「こころとからだの理解」を通して、無意識かつ反射的に行っているからだの動かし方について科学的に理解することを目指す。さらに、その過程において、疑問を明確化させ、自らがその疑問を解決できるように指導していく。単元を通して、授業内容を自分事として捉え、その課題解決に向けて粘り強く検討する態度を養うように指導するものとする。教師と生徒が同じ目標を持ち、その達成過程と達成度を振り返りながら、教師及び生徒の授業改善につなげていく。

2 単元の概要

- (1) 科目名 こころとからだの理解
- (2) 対象生徒 福祉科1年生 31名
- (3) 使用教材 こころとからだのしくみ（中央法規出版）、学習プリント、パワーポイント
- (4) 単元名 移動に関連したこころとからだのしくみ

3 単元の目標

- (1) 生活の場面に応じた生活支援に必要な移動に関するこころとからだのしくみについて理解するとともに、関連する技術を身に付けること。 【知識及び技術】
- (2) 地域での継続した生活を送る上での課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ科学的根拠に基づいて創造的に解決すること。 【思考力、判断力、表現力等】
- (3) 生活支援に必要な移動に関するこころとからだのしくみについて、自ら学び、主体的かつ協働的に取り組むこと。 【学びに向かう力、人間性等】

4 単元の評価規準

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
生活の場面に応じた生活支援に必要な移動に関するこころとからだのしくみについて理解する。	地域での継続した生活を送る上での移動に関連した課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ科学的根拠に基づいて創造的に解決しようとしている。	生活支援に必要な移動に関するこころとからだのしくみについて、自ら学び、主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

5 指導と評価の計画（10 時間）

第1節 移動のしくみ	6時間
1 なぜ移動をするのか	(2時間)
2 基本的な姿勢	(2時間)
3 ボディメカニクス	(2時間)
4 移動に関連したところのしくみ	(2時間)
5 移動に関連したからだのしくみ	(2時間)
第2節 心身の機能低下が移動に及ぼす影響	2時間
1 精神機能の低下が移動に及ぼす影響	(2時間)
2 身体機能の低下が移動に及ぼす影響	(2時間)
第3節 変化の気づきと対応	2時間
1 移動での観察のポイント	(1時間)
2 移動での医療職との連携のポイント	(1時間)

時間	学習活動	評価		評価方法
		観点	記録	
第1節 移動のしくみ 1なぜ移動するのか 2基本的な姿勢 【ねらい】基本的な姿勢を理解し、安定度の高い姿勢とその理由を考える。				
1	考えよう1「どんな姿勢があるかな？」 ・姿勢の種類を書き出し、安定度の高い順に並び替え、その理由を記す。 ワークシート	思		・姿勢の種類を多く書き出し、安定度の高い順に並び替える。その理由の根拠を記述している。 ワークシート
2	・教科書の記述や授業の内容からワークシートを完成する。また、小テスト及び定期考査に解答する。	知	○	・基本的な姿勢について理解し、適切に記述している。 ワークシート 定期考査

※○印は評定のために用いるもの。

第1節 移動のしくみ 3 ボディメカニクス				
【ねらい】 介助する上で負担の少ない姿勢を話し合い、その理由を根拠を持って考察する。				
3 ・ 4	話し合おう1「介助する時の楽な姿勢の使い方」 ・介助する際の負担の少ない姿勢を他者と考え、まとめる。 考えよう2 ・ボディメカニクスの考え方を体験を通して理解し、原則を守った時の姿勢と守らなかった時の姿勢を比較し、相違点を記述する。 ワークシート ・教科書の記述や授業の内容からワークシートを完成する。また、小テスト及び定期考査に解答する。	態		・介助する際の負担の少ない姿勢とその理由について協働的に学び合おうとしている。 ワークシート 観察
		思	○	・ボディメカニクスの原則を守った時の姿勢と守らなかった時の姿勢を比較し、相違点を分かりやすく表現している。 ワークシート
		知	○	・ボディメカニクスについて理解し、適切に記述している。 ワークシート 定期考査
第1節 移動のしくみ 4 移動に関連したところのしくみ 5 移動に関連したからだのしくみ				
【ねらい】 移動に伴う自分のからだの動きを客観的に捉え、基本的動作との相違点を考察する。				
5 ・ 6	考えよう3「姿勢の相違点」 ・寝返りや起き上がりの姿勢の基本的な動作と自分の動作を比較し、相違点を記述する。 理解しよう1 ・筋力やバランス能力をより必要とする姿勢を必要度の高い順に並べる。 ワークシート ・教科書の記述や授業の内容からワークシートを完成する。また、小テスト及び定期考査に解答する。 R80 ・第1節で学んだことを振り返り、80字で記述する。	思	○	・寝返りや起き上がりの姿勢の基本的な動作と自分の動作を比較し、相違点を分かりやすく表現している。 ワークシート
		知	○	・筋力やバランス能力の必要度が高い姿勢の順に正しく並べることができる。また、その際に根拠を記述している。 ワークシート
		知	○	・移動に伴うからだの動きや筋力・骨の強化について理解し、適切に記述している。 ワークシート 定期考査
		思		・第1節で学んだことを振り返り、80字で分かりやすく表現している。 ワークシート

※○印は評定のために用いるもの。

第2節 心身の機能低下が移動に及ぼす影響				
【ねらい】 身体機能の低下で引き起こされる状態を理解する。				
7 ・ 8	ワークシート ・教科書の記述や授業の内容からワークシートを完成する。また、小テスト及び定期考査に解答する。 R80 ・第1節で学んだことを振り返り、80字で記述する。	知 思	○	・骨折しやすい部位、廃用症候群、褥瘡等の身体機能低下の特徴について理解し、適切に記述している。 <div style="text-align: right;"> ワークシート 定期考査 </div> ・第2節で学んだことを振り返り、80字で分かりやすく表現している。 <div style="text-align: right;"> ワークシート </div>
第3節 変化の気づきと対応				
【ねらい】 移動での観察ポイントについて根拠を持って考察する。				
9 ・ 10	話し合おう2 ・心身機能が低下している方の移動における観察ポイントを他者と意見交換し、考察を深める。 深めよう「移動の疑問」 ・単元の最初に出した疑問が授業の内容で解決しているか確認する。授業だけでは解決していない場合は、自分で調べる。	態 思 態	○ ○	・心身機能が低下している方の移動における観察ポイントを他者と協働的に学び合おうとしている。 <div style="text-align: right;"> ワークシート 観察 </div> ・移動時の観察のポイントを分かりやすく表現している。 <div style="text-align: right;"> ワークシート </div> ・単元の最初に出した疑問が授業の内容で解決している場合はその答えを分かりやすく記入している。授業だけでは解決していない場合は、自分で調べ分かりやすくまとめている。

※○印は評定のために用いるもの。

6 評価例

【知識・技術】 5割

	「おおむね満足できる」 状況B	「十分満足できる」 状況A	「努力を要する」 状況Cと判断した生徒への指導 の手立て
第1節	・臥位や座位、立位などの基本的な姿勢について概ね理解している。	・臥位や座位、立位などの基本的な姿勢の特徴について根拠をもって十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。
	・ボディメカニクスの基本原則を理解している。	・ボディメカニクスの基本原則について根拠をもって十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせるとともに、実体験をさせる。
	・寝返りや起き上がり等の基本動作を理解し、筋力やバランス能力が必要な理由を理解している。	・寝返りや起き上がり等の基本動作に必要な筋肉やバランス能力について根拠をもって十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせるとともに、実体験をさせる。
	・筋力や骨の強化の方法について概ね理解している。	・筋力や骨の強化の方法について十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。
第2節	・骨折しやすい部位を理解している。	・骨折しやすい部位とその理由を十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。
	・廃用症候群の意味を理解している。	・廃用症候群の意味とその予防策について十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。
	・褥瘡の部位とその理由及び進行程度について理解している。	・褥瘡の部位とその理由について理解し、予防策を把握している。また、進行程度について十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。
	・麻痺の種類を正しく理解している。	・麻痺の種類や歩行の特徴について十分理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。
第3節	・移動時の医療職との連携ポイントを理解している。	・移動時の医療職との連携ポイントを十分に理解している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせる。

【思考・判断・表現】 3割

	「おおむね満足できる」 状況B	「十分満足できる」 状況A	「努力を要する」 状況Cと判断した生徒への指導 の手立て
第1節	・姿勢の種類を書き出し、安定度の高い順に並びかえている。	・姿勢の種類を多く書き出し、安定度の高い順に根拠を持って並びかえている。	・姿勢の種類を再度挙げさせ、どのような姿勢が安定度が高いか考えさせる。
	・ボディメカニクスの原則を守った時の姿勢と守らなかった時の姿勢を比較している。	・ボディメカニクスの原則を守った時の姿勢と守らなかった時の姿勢を比較し、相違点を分かりやすく表現している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせるとともに、実体験をさせる。
	・寝返りや起き上がりの姿勢の基本的な動作と自分の動作を比較している。	・寝返りや起き上がりの姿勢の基本的な動作と自分の動作を比較し、相違点を分かりやすく表現している。	・教科書やプリントを活用して再度確認をさせるとともに、実体験をさせる。
	・第1節で学んだことを振り返り、80字で表現している。	・第1節で学んだことを振り返り、R80のルールで分かりやすく表現している。	・不十分な点を示し、書き直しをさせる。
第2節	・第2節で学んだことを振り返り、80字で分かりやすく表現している。	・第2節で学んだことを振り返り、R80のルールで分かりやすく表現している。	・不十分な点を示し、書き直しをさせる。
第3節	・移動時の観察のポイントを考え、表現している。	・移動時の観察のポイントを根拠とともに分かりやすく表現している。	・単元を復習させ、再度考えさせる。

【主体的に学習に取り組む態度】 2割

	「おおむね満足できる」 状況B	「十分満足できる」 状況A	「努力を要する」 状況Cと判断した生徒への指導 の手立て
第1節	・介助する際の負担の少ない姿勢とその理由について協働的に学び合おうとしている。	・介助する際の負担の少ない姿勢とその理由について協働的に学び合い、粘り強く検討しようとしている。	・実体験を通して、体の使い方を確認させ、自分の考えたことを他者に伝えさせる。
第3節	・心身機能が低下している方の移動における観察ポイントを他者と協働的に学び合おうとしている。	・心身機能が低下している方の移動における観察ポイントを他者と協働的に学び合っている。また他グループの意見を聞いて、自らの考えと比較し、内容を調整しようとしている。	・他者の意見と自分の意見を整理させ、自らの考えを他者に伝えさせる。
	・単元の最初に出した疑問が授業の内容で解決している場合はその答えを分かりやすく記入している。授業だけでは解決していない場合は、自分で調べている。	・単元の最初に出した疑問が授業の内容で解決している場合はその答えを分かりやすく記入している。授業だけでは解決していない場合は、自分で複数の資料等から調べ分かりやすくまとめようとしている。	・単元を復習させ、再度考えさせる。また、疑問点を文献等から調べさせる。

7 授業の取組の様子

(1) 知識・技術

単元内容に入る前に、改めて観点別に評価をすることを説明し、目的意識を持てるようにした。しかし、現行では「知識・理解」であるため、生徒への表現は「知識や技術について定着できているかを観る」という表現で説明した。また、本観点は小テストや定期考査だけでなく、ワークシートにおける「理解しよう」の欄も該当することを伝えた。本単元の「理解しよう」の内容は、姿勢を保持するために筋力やバランス能力を必要とする順に記入していくものである。(参照A)

生徒のワークシートを確認すると、Aが7名、Bが10名、Cが12名、未提出2名となった。Cとなった生徒の多くは、支持基底面積が広いと姿勢は安定していることを言葉としては理解している。しかし、具体的な姿勢を提示して、どちらが安定しているかと問うと混乱していることが分かった。一方でAをつけた生徒は、並び替えの順番も説明も過不足なく記載している。授業や教科書で使用されている言葉を用いて、簡潔に説明できている生徒が多い。

参照A

<生徒の記入例>

Aをつけた生徒

安定度が高い ←————→ 座位

仰臥位	側臥位	背もたれ付椅子	丸椅子	両足立ち	片足立ち
-----	-----	---------	-----	------	------

- ・支持基底面積の広い順に並び変えた。
- ・下肢から筋力が低下する傾向があるため、立位は不安定である。

Bをつけた生徒

安定度が高い ←————→ 座位

仰臥位	腹臥位	あぐら座り	椅子に座る	両足立ち	片足立ち
-----	-----	-------	-------	------	------

- ・平衡感覚機能が必要な順。

Cをつけた生徒

安定度が高い ←————→ 座位

安定度は低い
立位

上向き	足組み座り
普通に立つ	

- ・筋肉をあまり使わなくて良い方が安定する。

評価規準

A
並び順及び根拠が適切である。
※既習の言葉を用いて説明している。

B
一部間違いはあるが、概ね適切である。

C
並び順と根拠が合っていない。
説明不足。

(2) 思考・判断・表現

本観点も「知識・技術」同様に事前に生徒へ説明した。ワークシートにおける「考えよう」の欄が該当することを伝えた。ここではその1つを紹介する。ボディメカニクスの原則を説明し、実際に原則を守った時の姿勢と守らなかった時の姿勢を比較させた。実体験を通して、ボディメカニクスの重要性に気づき、根拠に基づいてワークシートに記入しているかを評価している。(参照B)

生徒のワークシートを確認すると、Aが7名、Bが17名、Cが2名、未提出5名となった。この項目についてはAが多くなるのではないかと予測していたため、差が生じた。実際に検証することで理解を深めることができた一方、考える力が不足していることが分かった。活動性のある授業を行うと分かった気になるが、考える力が足りておらず、「なぜ大事なのか」ということをないがしろにしてしまう傾向にある。多くの生徒が「負担が大きくなる」とのみ記入しており、考察できていない。また、考えたことを文章化することが苦手な生徒も多いことから、このような評価になった。

参照B

考えよう 介助者と利用者の重心位置が遠いとどうなる？

<生徒の記入例>

Aをつけた生徒

- ・介助者が前のめりにならなくてはならず腰を痛めてしまう。
- ・大きな力が必要になるけど、上腕や手首にしか力が入らない。
- ・支える力が足りないから、利用者にも負担がかかる。

Bをつけた生徒

- ・前かがみの姿勢になって負担がかかる。

Cをつけた生徒

- ・介助する人の負担が減る。

取組中の様子



評価規準

A
身体の負担がなぜ起こるのかについて記載されている。
※介助者と利用者の双方の目線で記入されている。

B
身体の負担についてのみ記載されている。

C
説明不足。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

本観点も(1)(2)同様に事前に生徒へ説明した。ワークシートにおける「話し合おう」や「深めよう」の欄が該当することを伝えた。本単元最後の「話し合おう」では、高齢者が移動する時の観察のポイントについて話し合った。特に、話し合いに参加する姿勢については、机間巡視をしながら、適宜声をかけた。消極的で自分から発言せず、受け身姿勢の生徒には自信を持って考えを述べるように助言した。机に寝そべっていたり自分だけでワークシートを書き進めていたりするなど話し合いに参加する姿勢を持たない者には、今やるべきことを再度説明し、態度も評価していることを伝えた。

「深めよう」では、本単元最初のワークシートに単元内容に関する疑問点を記入させた。目的意識を持って授業に臨むことを重要視していることを伝えた。その上で、単元終了後に、自分の掲げた問題が解決できたかどうかを問い、解決できた場合はその答えを記入させ、解決できなかった場合には、その記載内容から評価を行った。(参照C)

生徒のワークシートを確認すると、Aが2名、Bが21名、Cが2名、未提出6名となった。目的や目標を持たずに授業を受けていることが多く、前向きな姿勢が読み取れた者は少なかった。しかし、他の観点と比較してBの評価をした生徒が多く、おおむね授業内については理解をしたと分析できる。一方で未提出生徒が多いことも対応しなければならない点であると考えている。

参照C

「深めよう」 単元開始前の移動に関する疑問を解決できたか。	
<生徒の記入例>	
「Aをつけた生徒」 ・「なぜ人は動くのか？」という疑問に対しては、目的も持つことで行動に移すことが分かった。でもまだよく分らないこともあるので、自分でもっと詳しく調べようと思う。「高齢者はなぜ転倒しやすいのか？」という疑問に対しては、円背など重心位置が前にあるからだと分かったので、介助するときには、姿勢や足の動きに注意したいと思った。	評価規準 A 疑問点に対する答えを適切に記載されており、学習への意欲が見られる。 B 疑問点に対する答えが適切に記載されている。 C 未記入。学習への意欲が見られない。
「Bをつけた生徒」 ・転倒する理由を知りたかったが、高齢者は変形性膝関節症などが原因になることがあったと分かった。	
「Cをつけた生徒」 ・横になって寝てしまう理由が分からなかったので知りたいです。	

8 成果と反省

本研究では令和4年度より始まる3観点の観点別の評価規準について研究を行った。現行においても観点別評価は行っているが、プリントの提出状況や不定期に行うグループワークの様子など、計画性をもって行ってこなかったことが実情である。しかし、来年度から、より細かく、より計画的に評価を行うためにも、事前の準備が欠かせないことを痛感した。生徒にはどこを何で評価するのかを明示することが重要であると考え。「評価されるから頑張る」という姿勢は本来の意図するところとは異なることは承知している。しかし、本校生徒の場合、「評価されるから頑張る」という側面がある。評価されなかった経験が多くなり、「頑張っても無駄」という思考回路になっている生徒も一定数いる。そのため、最初は評価の基準を明確に示し、評価されるポイントを掴むことも、有益のように考える。その過程をなかで、「頑張るということが評価される」という思考になり、学習への意欲が向上してくることを期待したい。

ワークシートを返却する際に、「このように考えたのはなぜ？」や「〇〇についても触れているとより良い」など、次へのヒントになることを添えることで、成長につながる。また、穴うめプリントではなく、自分の言葉で記入する欄を多くとることで、自分なりに考えて記入しようとする生徒が多かった。これまで「プリントは穴埋めをして提出するもの」であって「理解を深めるためのツール」として使っていない生徒が多いため、自分の言葉で説明することに苦労している生徒もいたが、未熟なりにも懸命に取り組む姿勢が見られ嬉しく思う。

本研究を通して得たことが3点ある。1点目は単元計画を立てる際にはワークシートが完成していることである。そうでなければ評価規準の作成ができない。教員間の綿密な打ち合わせと計画が必要である。2点目は、「思考・判断・表現」では「根拠を踏まえている」という視点を重要視していることを1年間通して説明することである。生徒のワークシートを見てみると、感想になってしまう傾向がある。根拠を踏まえているかどうかの評価の対象であることを年間共通して伝えることで、生徒も取り組みやすくなると推測する。3点目は「主体的に学習に取り組む態度」では、その場で「注意」「評価」をすることである。教員側の記録にとどめるだけではなく、「その態度は良くない」「その姿勢は良い」ということを明確に示すことで、学習への意欲につながることを期待したい。また、単元の開始時に、該当単元の目標を自分なりに設定することで目的意識を持って授業に臨むことができるのではないかと考える。

最後に、3観点別評価は喫緊の課題である。早期に教員間で情報共有し、単元計画を立てていくことが重要である。そして評価は生徒の学習意欲の向上のみならず、教員の資質向上のためであることも忘れてはならない。期待される効果が得られなかった時に、改めて単元計画を振り返り、教授法や使用する教材等を検討することが重要である。まだ、始まっていない新学習指導要領であるが、現段階で準備できるものを徹底し、来年度に備えていきたい。